園長通信～こころ～ №６８

トマト

2024.7.11

この前の日曜日のことである。外出先から帰宅すると、玄関先に何かが置いてあった。トマトだった。メッセージも添えられていた。「正男先生へ　〇〇村の△△△△です！ ご無沙汰しております！ トマト食べて下さい 〇〇産です」

わざわざ来てくれたのか。ちょうど、７月４日（火）の福島民友新聞の随想に「たらの芽」という原稿が掲載されたタイミングだった。〇〇村には、私が初任でお世話になった学校がある。なおかつ、学校のすぐそばの教員住宅に住んでいた。「たらの芽」は、初任時代の家庭訪問でのエピソードを綴ったものである。これは、単なる偶然なのか。

すぐに電話をした。お子さんの陸上大会で福島に来たとのことだった。私が年賀状に印刷しておいた住所を頼りに来てくれたそうである。残念ながら、年賀状に電話番号を入れてはいなかった。申し訳ないことをした。来てくれたのは、私が帰宅する３０分ほど前だった。

彼とは、ずっと会っていない。数えると、３０年以上になる。彼は、５年ほど前に、私の職場に電話をくれたことがあった。その当時、私は県立高校に勤務していた。その年は、創立百周年の記念すべき年だった。１１月上旬だったか、新聞に校長としての挨拶文が載った。それを読んだ彼が電話をくれたのである。話すのは、小学５年生以来だった。うれしかった。新聞の力はすごいと思ったことを覚えている。

今回もうれしかった。同時に、大変申し訳ないことをした。聞いてみると、民友新聞をとっているとのことだった。だが、７月４日の「たらの芽」は読んでいなかった。ということは、偶然このタイミングで来てくれたことになる。そうなのだろうか。どうも、何かの縁としか思えない。あまりにも、できすぎている。

〇〇村の方には、なかなか行く機会がない。そういえば、しばらく行っていない。そのうち、行ってみることにするか。そして、彼の家にも行ってみようと思う。電話では、二度ほど話したが、会ってはいない。どんな大人になっているのだろうか。今でも、彼が小学生だった頃の様子を思い出すことができる。元気な明るい子だった。

彼だけではなく、他の子どもたちは、元気にしているだろうか。立派な大人となり、各方面で活躍していることだろう。彼の話だと、村に残っているメンバーが多いとのことだった。何だかうれしい。

ほどなくして、我が家の食卓には、〇〇産のトマトが登場した。格別の味だった。〇〇村は、私を育ててくれた村である。その村でつくられたトマトが美味しくないわけがない。△△君、今度福島に来るときには連絡をください。ぜひ、会いたいです。